

昭和63年8月29日 低料第3種郵便物認可 白鳥 平成16年10月27日発行(年4回発行) 第166号

白鳥

第166号

全国低肺機能者グループ
東北白鳥会

〒980-0022
仙台市青葉区五橋2-12-2
仙台市福祉プラザ8F



追悼特集号

御挨拶 「お別れ会」に際して

東北白鳥会会長 渋谷 章

本日はこの暑いさなか、当會長村上きみ子のお別れ会にご参列いただき誠にありがとうございます。主催者を代表して一言ご挨拶を申し上げます。

東北白鳥会會長村上きみ子は、去る六月二十七日午前八時三十八分、ついに帰らぬ旅路についてしまいました。本日はこのような形で、彼女にお別れの言葉を述べなければならぬことは、我々会員一同まことに痛恨の極みであります。彼女は、自身の健康上の障害を省みることなく、日々低肺との戦い、そして白鳥会のため、いや多くの悩める人たちのための生涯を終えました。

病に悩んでいる人がいれば、絶え間ない連絡をし、常に励まし続けました。たとえ、その人が会員であろうとなかろうと分け隔てのない接し方は、誠に立派なものでした。

最近の状態は、さすがに痛々しいほどで、そばにいる我々でもどうしようもないほどの悲壮感に包まれており、酸素を補給しながら、東奔西走、まさに戦場における戦士そのものでした。

この数年何度か繰り返してきた入院も、その度に不思議な復元力で復帰してきました。

今回、入院したときには、さすがに、自分の病状を悟ったのか、白鳥会の今後のことなど言い残すような日々でしたが、それでも親しい友には、「私は不死鳥のように蘇って、再び、羽ばたくのよ」と意志の強いところも見せておりました。

本年五月二十九日の第二十一回東北白鳥会総会にも出てこれない状態となってしまう、ベットの中から、総会の進行を案じておりました。

会が、全国低肺の会の一員として正式に発足したのは、昭和五十九年のことでした。それ以来、当初は事務局長として、そしてまもなく、会長となって、以来十八年、低肺との闘争に身を挺しました。ある会員がつぶやいた言葉に、「会長はおのれ自身が、「白鳥になってしまった」いうのも、まさしく彼女の状態を言い得たものでした。

あの気力あふれたバイタリティはどこから出てくるのでしょうか、そして豊富な人脈、物怖じしない行動力、これらの人間力は、未だ世間に十分な理解が得られていない低肺に苦しむものたちへの大きな支えとなったものでした。

社会的な周知の努力には、積極的な報道機関へのアプローチ、そして、市、県はもとより、政府の関係機関、さらには、国会までも請願、陳情を幾度となく繰り返し、今日のような理解を得るまでに至ったものと思っております。それでもまだまだだと、絶え間ない戦いを続ける姿は、周囲のものたちをあきれさせるほどの迫力でした。

彼女のような指導者は、もはや得られないでしょう。まだまだ低肺者の現状は予断を許しません。高齢化に伴うさらなる障壁が見えてきております。これから彼女の意志を継いで東北白鳥会も前進していかなければなりません。

ご来場の皆様方を始め、多くの関係者のご支援とご鞭撻を切にお願い申し上げます。次第であります。

本日は、白鳥会と姉妹提携を結んでおります徳島O2会の湯浅名誉会長夫妻と横浜市もみじ会の斉藤会長さんが、遠路、ご自身の健康の懸念も省みずご参加いただきまして、故人はもとより、我々あとをつないでいくものたちにとりまして、大変な励みになるものであります。心より感謝申し上げます。

また、このように多くの皆様方にご参加いただき、故人をしのんでいただけるのは本人の人徳のなせるものではありませんが衷心より感謝申し上げます。

これからのひととき、多くの方々より、在りし日のエピソードやら思い出などお話をいただき、故人をしのんでいただければ、幸いと存じます。

そして、彼女には、これからは低肺に苦しむことなく、ゆっくりと旅でもしながら、自分のことだけを考えて過ごして行きたいと、言っておきたいと心底思いますが、さようならを言います。

追悼

宮城県知事 浅野 史郎

東北白鳥会会長村上きみ子様の御長逝をいたみ、謹んで哀悼の意を表します。

村上様には、ご自身が呼吸器に障害を抱えながらも、低肺機能者の方々の救済活動に文字通り東奔西走され、心を休める暇もなかったものと存じます。

ご家族の手厚いご看護と、村上様をお慕いする多くの方々の一日も早い御本復を祈る切なる願いもむなく、ついに、再び帰らぬ旅路につかれましたことは、まことに痛恨に堪えません。しかし村上様が、その一生をかけて低肺機能者の方々の支援のため尽くされた志は、必ずや実るものと確信しております。

ここに生前の御努力に対し心から感謝いたしますとともに、安らかな御冥福をお祈り申し上げます。

仙台市長 藤井 黎

謹んで村上きみ子様のご霊前に哀悼の辞をささげます。

東北白鳥会の会長として、長年にわたり同じ障害に悩む会員の連携を深め、呼吸器障害についての理解を深める活動や低肺機能者の生活向上を目指した幅広い活動を展開してこられました。ご自身が病氣療養中の身であるにもかかわらず、これまで立派な活動を継続してこられてことに対して、深く敬意を表するとこそでございます。

また、その活動は在宅酸素療法者酸素濃縮器等利用助成事業の実施、パルスオキシメーターの日常生活用具給付など、本市の障害者福祉施策の推進にもつながっております。

本市といたしましても、障害者一人ひとりが、その人らしい自立した生活を地域で送ることができるよう、今後とも各種福祉施策の充実に努めてまいりる所存でございます。

東北白鳥会の皆様には、村上前会長の御意思をどうぞ受け継がれまして、今後ますますご活躍されますようご期待申し上げます。

村上前会長の地域社会に貢献されました生前のご功績を偲び、心からご冥福をお祈り申し上げまして追悼の言葉といたします。

衆議院議員
伊藤 信太郎

東北白鳥会会長村上きみ子様の訃報に接し只々驚愕心からご冥福をお祈り申し上げます。

村上様とのお付き合いは平成十三年十月に初当選し、父の後を継いでからの短い期間でしたが、そのご活動に感心しておりました。

村上様は日頃から我が身を省みず、白鳥会会員の皆様や全国の病める仲間達の先頭に立って、低肺対策ほか医療費問題等に関する陳情・請願のため東奔西走されておられた、在りし日のお姿を思い浮かべ敬意を表する次第です。

会員の皆様におかれましても、村上様の意志を引き継がれ、念願である生命維持の最低限の条件整備に向かってご活躍されますよう私も村上様の意を体し、国政の場において微力を尽くして参りますので、天からお見守り賜われますようお祈りして追悼の言葉といたします。

衆議院議員
中野 正志

村上きみ子様の突然のご逝去をお別れ会のご案内で知り、驚愕いたしております。衷心より哀悼の意を表しますとともに、生前のご功績に改めて敬意を表します。

私の事務所はエレベーターもない二階に事務所をかまえております。階段を登って、村上きみ子様は同志の低肺患者のため何度か陳情に来ていただきました。そのお姿、お言葉おひとつおひとつを決して忘れることはできません。そして政治家として国政を預かる責任の重大さに身の引き締まる思いでございました。

村上きみ子様から頂戴しましたご意志をこれからも政治家として万難を排し、解決してまいります。最後にありますが、会員皆様のご落胆も如何ばかりかと存じますが、渋谷会長を中心に村上前会長の意思を受け継いで東北白鳥会がご発展されますことをお祈り致します。

衆議院議員

西村 明宏

村上きみ子さんが急逝されたとの報をお聞きし、驚きとともに悲しみで胸がつまる思いでした。私が故三塚博先生に政策担当としてお仕えしていた時、村上さんは、低肺者の皆様方が力強く社会活動をおこなうことが出来るよう立法、行政面から支援頂きたいとご尽力され、幾度となく足を運ばれたことを想い出します。村上さんご自身体調がおもわしくない時にも、それをおして陳情されるお姿は情熱ほとばしるものであり、故三塚先生も私も村上さんに背中を押されるようにさまざまに形でご協力をさせていただいたのが、つい昨日のことのようであります。

今後とも村上さんのご遺志を受け継いで皆様方がよりよい社会生活を過ごせるようサポートさせて頂く所存でございます。最後にいま一度村上きみ子さんの泉下の御平安を心からお祈り申し上げ、追悼の言葉とさせていただきます。

参議院議員

桜井 充

村上さんが亡くなられた事を知ったのは、参議院選挙が終わってからでした。体調が悪く今年の総会に欠席されておりまして、心配していたのですが、そこまで悪かったとは思ってもみませんでした。お盆の時にお線香をあげさせていただきました。その時、ご家族の方と話をさせていただいたのですが、「村上さんは白鳥会に命をかけていた」そして、「白鳥会が人生の全てであった」ということをおっしゃっておられました。

私が村上さんと最初にお会したのは六年前の参議院選挙の時でした。私は立候補直前まで、岩手病院の呼吸器科の医師として働いておりましたから、患者さんの苦しみは良く分かっておりました。そのためだと思いますが、呼吸器疾患の患者さんの窮状を強く訴えられ、患者さんの処遇を変えていきたいということに熱く語っておられました。

当選後私に対して、村上さんが繰り返し訴えていたことは、呼吸器疾患の患者さんの身体障害者二級の制定でした。身体障害者は疾患別にその症状に応じて、一級から四級までの等級が定められることになっていきます。その中で呼吸器疾患だけは二

級という等級が無いのです。この不公平を是正して欲しいということが、村上さんの主張であり、これは当然のことです。そこで、この問題に関して、厚生労働省と何回も折衝したのですが、大変だの一点張りでなかなか進展しませんでした。確かに疾患ごとの等級を定め、他の疾患とのバランスをとらなければならぬので、大変な作業であることは理解できます。しかし医学の進歩によって、現在の等級を見直さなければ、患者さんの間で不公平が生じていることも事実です。私が村上さんの遺志を継いでいかなければならないことは、呼吸器疾患の患者さんを含む身体障害者の二級の制定だと思っています。

村上さんお疲れさまでした。安らかにお眠りください。

宮城県議会副議長

石橋

信勝

本日は村上きみ子さんのお別れの会にご案内をいただき、本当にありがとうございました。

今年六月二十七日午後一時に、坂口厚生労働大臣が仙台に来られることを、私はその少し前に情報として知りました。以前から村上会長からは「生きている間に、もう一度坂口大臣に会わせてほしい」と、何度もお願いをされてきました。というのも、坂口さんが大臣になられた直後に、この仙台の地で低肺患者の皆様から患者救済の陳情を受ける機会がありました。その時、村上さんは鼻からチューブで酸素を吸入するといった、痛々しい姿で、直接坂口大臣に低肺患者の置かれている大変な状況を必死に訴えられ、一日も早く救済策を講じてほしいと強く要望されておられました。医師である大臣が村上さんの切実な訴えに真剣に耳を傾け深くうなずかれていた姿が印象に残っていました。

その後も、村上さんは機会あるごとに坂口大臣に訴えておられました。ある時は入院先の病院からぬけ出てこられたことがありました。それも、低肺患者を救済したいという村上さんの思いの表れであったと思います。私には村上さんのそんな思いがいたいほどよくわかりました。そして、村上さんの抱える課題は、もはや私自身の問題でもありました。

このため、先般、坂口大臣が仙台にこられるとの情報が入った時、私は村上さんに喜んでもらいたい一心で「村上さん、坂口大臣がついにこの仙台の地にこられることになりましたよ」と伝えさせていただいたのです。ところが、当日、村上会長ではなく、大友理事が一人でこられたのです。私は「会長はこられなかったのですか」と聞きましたが、大友理事もはっきりし

たことをなぜか言われなかったのです。それもそのはずです。まさか、その日の朝早くご逝去されていたなんて夢にも思わなかったのです。あれほど、坂口大臣に会いたいと懇願されていた村上会長の願いを実現させられず、ただただ残念というほかありません。

このうちは村上会長の思いを私たちがしっかりと受けとめ一つ一つ着実に具体的に実現させていくことが、会長にこたえていくただ一筋の道であると思います。私も多くの県会議員の皆様と力を合わせ、この宮城を「低肺対策日本一のモデル県」にすべく、力の限り頑張っていくことをここに改めてお誓いする次第です。

村上さん、どうぞ安らかにお休み下さい。ご冥福を心からお祈りいたします。

宮城県議会議員

中沢 幸男

「先生！ 村上です。パルスオキシメーター 今年こそはよろしくね。」

今でも電話がかかってくるような気がしてならない。今年からパルスオキシメーターの予算がついたのに、もう村上さんがいないなんて信じられない。村上さんはとてもおしゃれで、シャイで、やさしく情熱的だった。いつも会員のことはばかり心配なされ、まさに体をはって白鳥会のために尽くして下さいました。

私も村上さんと出会って、いくらかでも白鳥会のために働かせていただいた事を誇りに思っている。村上さん！ どうぞこれからも白鳥会を見守って下さい。

安らかに！

宮城県議会議員

ゆき みゆき

村上さんと出会ったのは、今から十五年前のことでした。ベレー帽がとてもよく似合い笑顔が素敵な方だなというのが第一印象でした。

テレビのリポーターを始めたばかりの私は、村上さんから「酸素を吸うこと、生きる環境整備がなされていない」と低肺患者のみなさんの日常生活を知り、ショックを受けたことを今でも鮮明に覚えています。その時から、命がけで低肺患者の制度創設へ戦い続ける村上さんとお付き合いが始まりました。村上さんの必死の姿は、皆の心を動かし、県を、国を動かしました。一つの願いが叶うことに同じ仲間が他界され、悲しみ、また立ち上がり戦い続けていらっしゃいました。

村上さんの思いをつなげるためにもこれからも白鳥会の皆さんと力を合わせて努力し続けます。
村上さん 天国で見守っていて下さい。

宮城県議会議員

菊地 文博

村上きみ子会長様のご逝去の報に接し、心から哀悼の意を捧げます。

生前、長年に亘り、低肺患者救済のためにご尽力をいただきましたことに対し、深く感謝の意を表しますとともに、心からご冥福をお祈り申し上げます。

宮城県議会議員

坂下 康子

あれは、確か平成十三年、県で塩釜市に杏友園を新築移転し、低肺患者対応の部屋が二部屋だけ作られた時、村上さんと新杏友園の施設管理者に対し「部屋についてもっと患者の立場にたって配慮して欲しい」旨の陳情をしたことがありました。あの時の村上さんの強い言葉のはしと迫力―失礼ながら他でよくあるソフトな陳情とは全くかけはなれた、その姿に「本当に命の、心からの叫びだったなあ」と圧倒されたことを想い出しております。

突然のご逝去は真に残念ですが、せいっぱい生きられた生前のお姿を偲び、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

宮城県議会議員

藤原 範典

村上きみ子様の突然の御逝去の報に接した時には、本当に驚きました。お身体が悪いのは、重々承知致しておりましたが、いつも前向きな迫力あるお姿に接していたので、これからも暫くは、低肺患者の方々の先頭に立たれて行くものと信じていました。

誠に立派な方であり、村上きみ子様により低肺患者の方々は勿論、難病に苦しむ人達に大きな光明を与えたとともに、県の福祉行政の本来のあり方を指し示し、福祉の質を向上させたことは、大きな業績だと思います。

今後は、村上きみ様が切り拓かれた道を、さらに大道にすべく、皆で精進して行きたいものです。心から御冥福をお祈り申し上げます。

仙台市議会議員

熊谷 善夫

初めて村上さんの家を訪ねた時、初めて低肺者の生活の実態を知った時、そして初めて会報「白鳥」を手にした時、私は少しばかりだったかもしれませんが、何か胸の熱くなる感動を覚えたものです。それは、ひたむきに宿命に立ち向かっている一人の女性の姿に接したからだと今にして思うのです。もう十数年前のことです。

今日まで、幾度となく村上さんから低肺患者への行政支援の橋渡し役を望まれ、そしてその取組に尻をたたかれてきました。期待にさほど応えられなかったことを無念に思っております。あの苦しい体調での、頑固なまでの責任感による精力的な行動、まぶたに焼き付いているそのお姿はまだまだ薄れることなく語りかけてくれています。市当局や上京して厚労省へ陳情を重ねたこと、低肺ホーム設置のこと、酸素濃縮器電気料金のこと、福祉タクシーのこと、パルスオキシメーターのこと、福祉プラザ使用上のこと、みんな寒い街頭に立って訴えたこと、水曜日の会報作りのこと、個人的なことも。

村上さんは白鳥会の目的、低肺者の救済と支援に人生のすべてを捧げられたと思います。一体ご自身はお身体をどれほど大切にされたでしょうか。私は村上さんの家を訪問の都度、ご自愛を促してきたのでしたけれども。

本来、福祉への貢献で顕彰されるべき人は村上きみ子さんのような方なのだと思います。
ご冥福を祈っております。

仙台市議会議員

佐藤 わか子

私が、村上きみ子さんと、初めてお会いしたのは六、七年前でしょうか、県会議員の「ゆさみゆき」さんから紹介されたのが、きっかけでした。それ以来、村上さんとはさまざまな場面で、一緒に活動させて頂いたり、いろいろな要望活動に同行させて頂いたりしてきました。村上さん自ら酸素ボンベを持ちながら、一生懸命に低肺で苦しんでいる人達のために頑張る姿は、多くの人の心を動かし、さまざまな実績をあげてこられたと思います。本当に、村上きみ子さんの活動には頭が下がる思いでした。

そんな中、彼女の突然の訃報が飛び込んで来ました。お別れ会が済んだ今でも、村上さんが亡くなったことが信じられませんが、何か、頼みたいことがあると、すぐに電話で呼び出されたものです。村上さんには、相手にいやと言わせないような迫力と存在感がありました。それは、彼女がいつも言っていたように「低肺患者さんの多くは、高齢化していて、いつ症状が悪化するかも知れない状況で、時間がない」という。必死の思いの表れだったでしょう。

私も、その迫力に引き込まれるように、お付き合いをさせて頂きましたが、今は「村上さんもう頑張らなくてもいいよ・・・ ゆっくり休んでね・・・村上さんの思いを引き継いで、これからも頑張るからね。」と心から申し上げて、御冥福をお祈りしたいと思っています。

仙台市身体障害者福祉協会

会長 大沼 修

村上きみ子さんを偲んで追悼文をとのことですので、いろいろと思い出しながら記してみます。村上さんご自身のことは、あまりよく存じあげないのですが、出合いのときは強烈でしたのでよく覚えております。

昭和五十年代後半のある日のことでした。村上さんから一本の電話が入りました。それまでは、東北白鳥会仙台支部代表塩崎高志さん（国立玉浦療養所に同時入所していて面識があった）のお友達であるぐらいでしたので、いぶかしく思いながら受話器を取りましたところ「徳島の近藤先生が来仙され玉西会の総会に出席されるそうですが、紹介してもらえませんか」というので会ってお話を聞きました。「近藤先生はどのような人ですか、また玉西会とはどのような会ですか」と、近藤先生は昭和三十年代に宮城県内に四箇所ありました国立療養所の中の一つである（国立玉浦療養所）の所長の地位にあり、カリエスの権威ということでは全国的に大変有名な先生でありました。のちに国立玉浦療養所と仙台にありました国立西多賀療養所が合併し、現在の西多賀の地に移転した時にも所長として赴任された方でした、現在筋ジストロフィーの児童が多く入所している、公立の学校として授業をしています、その前進でありますベットスクールを開設したのも近藤先生であります。玉西会はこの玉浦と西多賀の療養所を無事退所した患者たちの親睦団体であります。この玉西会が開かれることを耳にした村上さんが私のところへ話を持ち込んだものと思われまます。私も今までお名前をお聞きするぐらいで、どこような考えを持った人なのか全然予備知識がありませんでしたので、下手に紹介はできないと思い、どんなお話をするのでしようかとお聞きすると、低肺機

能障害者の啓蒙活動をするため多くの先生方の力が必要になる。それについてご協力をお願いしたいということでした。

会ってお話をしていますと熱意とパワーが伝わってきました。これはものすごい人だなと感じました。その後まもなく近藤先生は亡くなりましたが、全国的に支持者を募る村上さんの活動の姿は、本当に感動を覚えるものがありました。

昨年九月十三日～十四日に北九州で行われました政令指定都市身体障害者団体連絡協議会の、内部障害者部会において呼吸器機能障害者は、外見上は障害が見えないので認識されていないが、慢性の低酸素状態が長く続いているため、高次脳機能障害に陥る危険性があるので、障害等級別の決定の見直しと、生命維持のための日常生活サポートを、公的に実現してほしいと提案されました。

そのときも無理を押し出かけたため、地元の病院で治療を受けながらの大会参加であったと聞いています。

このように低肺機能障害者の福祉活動に、人生の大半を尽くして下さった村上さんが、天国で安らかにすごされるようお願いとして又、私たちも村上さんをお手本にして真摯な態度で情熱を持ち、精一杯障害者福祉のために頑張って活動していきたいと思っております

